

実際の入試問題を使って、この講座の効果をご説明します

哲学・思想 No.3

「死とは何か」を哲学で読む —— エピクロス・ハイデガー・現代の死生学

★ 清光学院の講師は、死生学・生命倫理を専門とする大学教員です。ホスピス・緩和ケアの現場に携わりながら「死とは何か」を哲学的に研究してきた当事者であり、その経験がこの講座の根拠になっています。

1. この講座が有効な入試問題のタイプ

① 死生観・ターミナルケアを問う小論文

「死を前にした患者にどう向き合うか」という小論文は医学部で頻出である。エピクロス・ハイデガーという哲学的視点を持つ受験生は、感情論ではなく哲学的な根拠で死生観を論じられる。

② 安楽死・尊厳死を問う問題

「安楽死を認めるべきか」という問いは、医学部面接・小論文の定番である。死の哲学的意味を知っている受験生は、自律尊重・善行・害悪禁止という倫理原則で論じられる。

③ 「緩和ケア・ホスピス」型の面接

「終末期患者にとって最も大切なことは何か」という面接質問に、死生学の視点から答えられる受験生は、試験官に深い人間理解があると判断される。

2. 具体的な大学・学部との対応

大学・学部	出題の傾向	本講座との対応
医学部全般（小論文・面接）	終末期医療・死生観を論じる問題	哲学的視点が死生観の論述を深める
医学部推薦・総合型選抜（面接）	「安楽死・尊厳死」型の問い	エピクロス・ハイデガーの知識が倫理的論述を可能にする
看護・医療系学部（全般）	ターミナルケア・緩和ケアの意義	死生学の視点がケアの哲学的根拠を与える
福祉・社会学系学部	高齢社会における死の文化的意味	哲学的死生観が社会的文脈の論述を深める

3. なぜ差がつくのか・受講後に期待できる変化

「死を前にした患者に寄り添うことが大切です」という答えは採点者には「哲学的思考がない」と映る。授業の詳細な内容はここでは述べないが、受講後には（1）エピクロス・ハイデガーの死の哲学を自分の言葉で説明できる、（2）安楽死・尊厳死を哲学的枠組みで論じられる、（3）面接で死生観を哲学的根拠で語れる、という変化が起きる。

清光学院の講師陣は、関連する入試問題で「表層的な答案」と「深い理解を示す答案」の評価の差がいかに大きいかを採点者として知っている。その実感が、この講座の根拠である。